審査結果の要旨

氏　名　内田　祥士

近代日本の建築界に於ける日光東照宮に関する言説に関しては、概ね調べがついており、その整理も為されているが、それらを精査すると、明治中期には、既に賞賛と批判が混在した言説が見出される。このことは、当時の専門家の内部に、東照宮評価を巡る葛藤が存在していたことを示しているが、その原因と形成過程に関しては、既往の研究を見出せない。

これが、ある時期に限られた事柄であれば、価値観の転換期に於ける一時的な混乱との理解も可能である。しかし、東照宮の場合、明治中期に顕在化して以降繰り返し表れ、昭和初期に至って更に深まっていること、また、戦後に於いて尚、解消されなかった等、一時的な現象として理解するのは困難である。近世初期を代表する建築の一つである東照宮の建築的評価が、これほど長い期間に渡って混乱した事実は、歴史的建造物の建築的評価を考える上でも注目すべき事例であるが、本論文は、事態が顕在化する明治中期以降昭和初期に至る日光東照宮評価の在り様をその背景と共に検証したものである。

本論は、８章からなる。まず第１章は、近代日本の東照宮研究に於ける最大の発見と言ってよい、寛永造替工期の訂正の経緯とその影響についての検証である。寛永造替とは、現在、私達が見ることの出来る日光東照宮の主要な部分を決定付けた造替であったとされているが、寛永造替工期の訂正は、その工期が、当時、一般に考えられていた十数年ではなく、僅か一年数ヶ月に過ぎなかった事実を明らかにたものであった。従って、近代に於ける東照宮評価を検証するに当たって、まずはその前提として、この訂正が、当時の東照宮評価に如何なる影響を与えたのかを、確認する必要がある。その結果、寛永造替工期の訂正は、建築界にとって、工期に言及し建築の評価を相対化することの意味を問うものであって、東照宮自体の建築的評価には影響を与えなかった点が明らかにされている。

第２章では、葛藤を表明した専門家の多くが明治に育った近代日本人であった点に注目し、彼らが、どの様にして自らの東照宮観を獲得するに至ったか、との観点から、近代日本の教育に於ける東照宮評価に焦点を当てている。初等教育に於ける東照宮評価は、明治の初頭、南摩綱紀らによって、最初、地理の教科書に記載されたことを明らかにした上で、その評価が、江戸時代の評価を継承するもので、多くの場合、壮麗という言葉で積極的に記述された事実を指摘している。一方、近代日本の建築界に於ける評価は、明治３０年代には、塚本靖や伊東忠太或いは関野貞らが、批判的な評価を提出する様になること、彼らが、それまでの壮麗という評価を濫用或いは繁縟といった表現で批判しつつも、東照宮が依然として何物かであるとの認識を持っていたことに言及した上で、初等教育には、敗戦に至るまでその評価に全く揺らぎがなく、寧ろ、礼賛の方向へと強化されていったこと、また、文語体が口語体に、旧字体が新字体に改められるに従って、美しい或いは人工の美という言葉に改められていった事実を指摘し、専門家の葛藤と初等教育に於ける礼賛という構図が存在していた点を明らかにしている。

第３章では、逆に高等教育及び専門教育に注目しつつ、近代日本の東照宮評価を巡る葛藤が、その後どの様に継承或いは解消されていったのかを検討している。本章では、日本建築史の通史が、高等教育及び専門教育に於ける教科書として用いられるべく刊行されたものであった事実を指摘した上で、これらを通観し、明治中期に専門家の内に生じた賞賛と批判の併存という葛藤が、昭和に至って、批判の側がより強化され、義務教育と高等教育の対峙という事態へ進みつつあったことが明らかにされる。

また、研究者にとってタウトの東照宮批判は、変質しつつもいまだ残されていた自らの葛藤を精算する一つの有力な契機となったが、葛藤の精算へと進んだ研究者も、実は、人々の圧倒的な東照宮礼賛を前提としており、彼らが幾ら批判しても東照宮の価値は決して損なわれないという信頼感と絶望感が同居した認識の中で発言していたと推察される点も指摘されている。

第４章は、第２章の補足に当たる内容で、初等教育に於ける国語教科書と歴史教科書に於ける東照宮評価を通観し、その東照宮評価を明らかにしたものである。近代日本の初等教育に於ける東照宮評価を推進したのは、地理教科書と国語教科書であったが、国語教科書への記載の背景には地理が未だ必修科目ではなく、国語の時間に国語教科書を通して地理を学ぶという状況が教育の現場に存在したこと、従って、初等教育に於いて積極的な東照宮評価を支えていた分野は、やはり地理であったこと、更に、国語教科書に組み込み得る地理の頁は非常に限られていた訳であるから、東照宮が主要な国語教科書に記述されている事実は、地理に於いて極めて重要な項目であったと判断されることが示されている。

第５章から第７章までは、何れも事例及び事例研究である。尚、第７章に６．６東照宮の指定経緯が追記され、指定順位に見る東照宮評価に関する考察が加えられた。

第８章では、明治中期に専門家の間に生じた、東照宮に於ける壮麗とは美なのかとの問いが、昭和に至って東照宮は美しいのかという問いへと転換し、ついには、初等教育と高等・専門教育との対峙へと進んでいった経緯と、専門家が、先ず被教育者として、後に教育者として、この構図の形成過程に深く関わっていた点を指摘した上で、専門家の東照宮批判が強化されていく背景に、高等教育を受けなかった大多数の人々による東照宮礼賛という状況が存在し、専門家の東照宮批判が、実は、人々の圧倒的な東照宮礼賛を前提として行われており、彼らが幾ら批判しても東照宮の価値は決して損なわれないという信頼感と絶望感が同居した認識の下にあった事実を明らかにし、専門家にとって、東照宮は安心して批判できる対象であったという構図こそが、近代に於ける東照宮評価に於いて最も重要な点であった考えられるとの研究成果が明らかにされている。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。